

ニッポン

ドクター和の



臨終凶巻

「君のことを治せなくて本当にごめんさい」

ラグビーの神戸製鋼や日本代表でスター選手として活躍した平尾誠二さんをしのぶ感謝の集いで今年2月、京都大iPS細胞研究所長の山中伸弥教授が弔辞で述べた言葉です。

山中氏は高校時代から平尾さんに憧れていたといいます。私も同年代、同じ神戸人として、若い頃から平尾さんが大好きだったので、訃報に接したときは大きなショックを受けました。平尾さんは2016年10月20日逝去。53歳という若さで天国のフールドに旅立たれました。あれから1年がたとうとしています。

25 平尾誠二



長尾和宏（ながお・かずひろ）
東大医学博士、大阪第二病二内科入局。1995年、京都府尼崎市で在宅医療まで総合診療を目指す。著「痛くない死に方」は関西国際大学客員教授。

命を奪ったのは胆管細胞がんでした。一昨年亡くなった女優の川島なお美さんと同じがんです。

胆管は、肝臓の中を通る直径10ミリの管で、胆汁を十二指腸まで送り出す役割をしています。ですから、胆管がんは肝がんの一種とされていますが、肝細胞がんとはその性質も治療法も異なります。

2014年の統計では、肝が

んは男性は肺、胃、大腸に続き死亡者数第4位。女性は第6位です。

肝がん全体の年間死亡者数は3万人といわれていますが、胆管がんはそのうちの10%。まだその原因も解明されていないのです。

肝細胞がんはウイルス性肝炎や脂肪肝などハイリスクの人を重点的にフォローすれば早期発見・早期治療が可能です。しかし胆管がんはハイリスクグループが同定されておらず、検診でも見つかることが少ないため早期発見は困難です。

その点、人間ドックでこのがんが見つかった川島さんはまれな例といえるでしょう。かなり進行した状態で見つかることが多く、5年生存率は30%50%です。発覚したときには余命半年ないし3カ月といわれることも少なくないがんなのです。

平尾さんのがんが発覚したのは、亡くなる1年ほど

前。周囲には胃潰瘍と説明していましたが、その時点で余命3カ月との診断を受けていたそうです。しかし、平尾さんは最後まであきらめなかった。

山中氏が弔辞で明かしたところによれば、iPS細胞による世界初の治療にもチャレンジしたといいます。「どんな副作用が出るかわからない」と説明する山中氏に「俺ら世界初のことをやっているんや！」と明るく返したそうです。

余命3カ月といわれながら、不屈の精神力で1年以上闘い抜いたミスター・ラグビー。生前残したこの言葉が私は大好きです。

「時間は命の一部なんです。今の時間を大事にできない人は、未来の時間もきつと大事にはできない。次な道は開けない」
今、この時間を精いっぱい生きるだけ…。ほれますねえ。真にカッコいい男とは男にほられる男。平尾さんはその鑑です。素敵でした。

世界初にトライした最期